

彼女の代わりに女体化して犯された…彼女も一緒に先輩の性処理ペットになりました。

俺とユイは、付き合って3年になる。学生時代からずっと一緒にいて、将来の結婚も自然と視野に入れていた。俺、シュウジは今21歳の大学生。ユイは23歳で、社会人一年目。彼女の方が先に社会に出て、毎日いろんな会社の話を聞かされるたび、胸の奥がざわつく。

「ただいまー」

その日の夜も、ユイが疲れた顔でマンションのドアを開けた。背が低くて可愛らしい顔立ちの彼女は、制服のブラウスを少し緩めていて、大きな胸が強調されている。俺はソファから立ち上がって、いつものように彼女を抱きしめた。

「おかえり、ユイ。今日も遅かったな」

「うん、ごめんね。シュウジ、待っていてくれてありがとう」

ユイは俺の胸に顔を埋めて、甘えるように体を預けてくる。柔らかい感触と、ほのかに残る香水の匂いが、俺の嫉妬を一瞬だけ溶かしてくれる。でも、今

日もその話題が出ることはわかっていた。

夕食と一緒に食べながら、ユイがいつものように会社の話を始めた。

「今日もタカシさんに教育係として色々教えてもらったよ。あの人、本当に仕事ができるんだよね。イケメンだし、部署のみんなから尊敬されてるって」

タカシ。ユイの会社の先輩で、30歳。俺が一番気にしている男だ。ユイが話すたびに、その名前が耳に突き刺さる。

「……またその話かよ。俺、嫉妬しちゃうんだけど」

俺がフォークを置いてぼやくと、ユイはくすくすと笑った。

「えー、また？ シュウジってば可愛いなあ。タカシさん、イケメンで仕事もできるけど、私にはシュウジがいるもん。興味ないってば」

「でも、食事に誘われたって言ってたよな……」

「それは業務の延長みたいな感じだよ。断ってるし。大丈夫だって」

ユイは俺の隣に移動してきて、頭を優しく撫でてくる。年上の彼女にこうされるといつも、子供扱いされている気がして複雑な気持ちになる。でも、その手つきが気持ちよくて、つい甘えてしまう。

「ほらほら、そんなに拗ねないの。シュウジは私の大事な彼氏なんだから。タカシさんみたいな人に取りられるわけないじゃん」

「わかってるよ……でも、ユイが社会人になってから、俺だけ置いていかれてるみたいでさ。大学行ってるだけなのに、ユイは毎日かっこいい大人と一緒に仕事してるんだろ？」

俺がため息をつくとき、ユイは俺の頬にキスをして、耳元で囁いた。

「ふふ、子供みたい。心配性なんだから。今日はもうその話やめよ？ 代わりに……私、シュウジに甘えたい気分」

彼女の指が俺の太ももを優しく撫でる。大きな瞳で上目遣いに見つめられて、

俺の心臓が早鐘のように鳴り始めた。

「ユイ……」

「ん？　どうしたの？　もっと慰めてほしい？」

ユイは悪戯っぽく微笑みながら、俺の首に腕を回してくる。彼女の柔らかい胸が腕に当たる感触に、頭の中がぼんやりする。でも、心のどこかで、タカシの影がまだチラついていた。

（このままじゃ……本当に大丈夫なのか？）

そんな俺を、ユイはいつものように子供扱いして、優しく慰めてくれるのだった。

ユイの魅力に押されるように、その夜は激しくセックスをした。

「んっ……シュージ、もっと……」

ユイの甘い声が部屋に響く。大きな胸が俺の胸板に押しつけられ、柔らかい体が俺を受け入れてくれる。彼女の腰が妖しく動き、俺は夢中になって腰を振り続けた。

「ユイ……好きだよ……」

「あんっ……私も……シウウジだけだよ……」

クライマックスに達したあと、ユイは俺の胸に体を預けて、優しく頭を撫でてくれた。その温もりに、さっきまでの嫉妬が少しだけ溶けていく気がした。

「……少し、安心したかも」

「ふふ、よかった。シウウジは本当に可愛いんだから」

次の日、俺たちはスーツを買いに行く約束をしていた。大学で就活が近づいてきたので、ユイが「一緒に選んであげる」と連れ出してくれたのだ。

安いリクルートスーツの店に入ると、ユイが慣れた様子で店内を進んでいく。

俺は少し情けなく思いながらも、知識がないので彼女にリードされるしかなかった。

「この色はどう？ シュウジの体型に合いそう」

「うん……ユイが選んでくれるなら」

試着室でスーツに着替えていると、外からユイの声が聞こえてきた。誰かと話しているようだ。

（誰だ……？）

少し気になって試着室のカーテンを開けると、そこに見たことのない男性が立っていた。背が高くて、整った顔立ちの男。ブランドものの時計が光っている。

その男は俺に挨拶もせず、ユイに聞いた。

「彼氏？」

ユイは少し緊張した様子で、敬語で答えた。

「はい、そうです」

「ふーん」

男は俺を値踏みするような目で見下ろした。含みのある笑みを浮かべると、俺には一言もかけずにユイにだけ声をかけた。

「また会社でね、ユイちゃん」

そう言って、男は悠々と店を出て行った。男の手には、俺が今試着しているスーツの何倍も高級そうなブランドスーツの紙袋が握られていた。

スーツを買い終わり、店を出たあと、俺は我慢できずに聞いた。

「……今の人、誰？」

ユイは少し困った顔をして、俺の腕に絡みついてきた。

「タカシさんだよ。偶然会っちゃったみたい」

「タカシ……？」

俺は少しムツとして、足を止めた。ユイはすぐに俺の頬に手を当てて、いつものように慰めてくれる。

「ねえ、気にしないでいいってば。あの人、ただの先輩だよ。シュウジがそんなに拗ねる顔すると、私も心配になっちゃう」

「でも、さっきの態度……俺のこと完全に無視してたぞ。ユイにだけ親しげに……」

「ふふ、子供みたい。ほら、手つないで帰ろ？ 今日にはシュウジのために来たんだから」

ユイは俺の手を握り、優しく指を絡めてきた。彼女の柔らかい笑顔に、俺は

また少し胸のざわつきを飲み込んだ。

（本当に……大丈夫なのか？）

でもそのとき、俺はまだ知らなかった。これが、タカシとの本当の始まりだということ。

その日から、タカシの行動が変わってきた。

ユイは俺が余計に気にしないようにと、毎日のように全てを報告してくれるようになった。

「今日もタカシさんに食事誘われたよ。『今度、二人でゆっくりどう？』って」

夕食の席でユイがため息混じりに言う。俺はフォークを握る手に力が入った。

「またかよ……断ったんだよな？」

「もちろん。『彼氏がいるので』ってちゃんと断ってるよ。でもタカシさん、笑いながらこう言ってくるの。『あんな女みたいなヘナヘナしたやつやめとけよ。ユイちゃんみたいな可愛い子にはもっと相応しい男がいるだろ』って」

「……っ」

俺の胸に熱いものが込み上げた。女みたいなヘナヘナしたやつ。確かに俺は背も低めで、顔も童顔だし、ユイの隣にいと頼りなく見えるのかもしれない。でも、それを他人に言われるのは腹が立った。

ユイはすぐに俺の手に自分の手を重ねて、優しく微笑んだ。

「ねえ、そんな顔しないで。シュウジがヘナヘナしてても、私はそんなシュウジが好きなんだから。他の人になんて言われても関係ないよ？」

「ユイ……」

彼女の言葉は嬉しかった。でも、同時にタカシの言葉が頭の中で反芻されて、腹立たしさと情けなさが混じり合う。

それから数日考えた末、俺は決心した。ユイからタカシの手を引いてもらうために、自分で動くことにした。

ある平日の夕方、俺はユイの会社の前で待ち伏せした。スーツ姿のサラリーマンたちが次々と出てくる中、俺は息を潜めてタカシを待った。

しばらくして、タカシが会社から出てきた。そして、その隣にユイの姿があった。

(……っ！)

ドキッとして心臓が跳ね上がる。このまま二人で食事に行ったり、ホテルにでも行ってしまおうんじゃないか——そんな最悪の想像が頭をよぎった。

しかし、そうはならなかった。

会話の内容までは聞こえなかったが、タカシの低い声だけが風に乗って届いた。

「いつか食事くらい行ってくれよ？ ユイちゃん」

ユイが小さく頭を下げ、何か返事をする。すると二人はそこで別れ、タカシは一人でこちら側に歩いてきた。

俺は勇気を振り絞って、数歩前に出て声をかけた。

「あの……タカシさん、ですよね？」

タカシは足を止め、俺の顔を見て一瞬眉を寄せた。そしてすぐに、例の含みのある笑みを浮かべた。

「へえ……お前か。ユイちゃんの彼氏」

彼の視線が俺を上から下まで舐めるように這う。俺は喉が乾くのを感じながら、なんとか言葉を続けた。

「ユイのことで……少し話がしたいんですけど」

タカシに真正面から切り出した。

「あの……ユイにちょっかい出すのはやめてください」

声が震えてしまっていた。拳を握りしめ、精一杯の勇気を振り絞って言葉を押し出した。

タカシは一瞬目を細め、それから余裕たっぷりの笑みを浮かべた。

「へえ……カッコイイね。ユイちゃんの彼氏、意外と男気あるじゃん」

茶化すような口調に、俺の頬が熱くなった。

「ふざけないでください。本気です。ユイは俺の彼女なんです。食事の誘いも、これ以上やめてほしい」

タカシは腕を組んで、俺をじつくりと見下ろした。背が高いせいで、余計に威圧感がある。

「本気か。ふーん……」

少し考えてから、タカシは低い声で話し始めた。

「正直に言うと、もう少しで落とせると思うんだよね、ユイちゃん。最初は彼氏がいるって固かったけど、最近は俺の話に笑顔が増えてきた。仕事の愚痴を聞いてあげたり、褒めたりしていると、目が少し柔らかくなるんだよ。あと……胸の谷間をチラチラ見せてくるのも、最近増えた気がする」

「そんなはず……ない……」

俺は否定しなかった。でも、タカシの言葉がユイの最近のちょっとした変化——夜に会社のこと、特にタカシの話をするときの微妙な表情——と重なって、胸の奥がざわついた。

タカシはさらに続ける。

「少しずつ心を許してるよ。『シュウジくんは優しいけど……』みたいな話

も出てる。まあ、まだ本気で俺に落ちてるわけじゃないけど、もう一押しでいけそうなんだよね」

俺はそんな話も本当かもしれないと思いながら、信じたくない気持ちと不安が一気に増幅していくのを感じた。頭の中でユイの笑顔と、タカシの余裕の笑みが交互に浮かぶ。

タカシは俺の顔を見て、満足そうに頷いた。

「別に、俺が身を引いてあげてもいいよ？ ユイちゃんを諦めても」

「……本当に？」

期待が一瞬過ぎった。しかしタカシは人懐っこい笑顔を浮かべて、俺の肩に軽く手を置いた。

「その代わり……少しかけ付き合ってよ」

「え……？」

俺は目を丸くした。タカシの笑顔は優しげに見えたが、その奥に何か含みのある光が宿っている気がした。

「どういう……意味ですか？」

タカシは俺の耳元に顔を近づけ、低い声で囁くように言った。

「まあ、詳しくは今度ゆっくり話そうか。シュウジくん……可愛い顔してるね」

その言葉に、俺の背筋に冷たいものが走った。

（何を……言ってるんだ、この人……？）

その週の土曜日に「ココに来るように」と、タカシからメモを渡された。そこにはマンションの住所が書かれていた。

（タカシの家……だろうか）

俺はユイには何も伝えずに、その週末、指定された住所まで一人で向かった。胸の奥に不安と緊張が渦巻いていたが、ユイを守るためだと思い、足を進めた。

インターホンを鳴らすと、すぐにタカシ本人が出てきた。

「来たね。入って」

部屋の中は、30歳のひとり暮らしにしてはかなり豪華だった。高そうな家具が並び、広いリビングが広がっている。

「適当に座って」

タカシに言われ、俺はソファに腰を下ろした。タカシはキッチンでコーヒーを淹れて、俺の前に置いてくれた。

俺は警戒しながらも、コーヒーカップに口をつけた。苦い味が緊張を少しだけ和らげてくれる。

私服のタカシはラフなシャツとパンツ姿なのに、なぜかとても決まっていた。余裕のある大人の男という感じがする。

俺は意を決して口を開いた。

「……どうしたら、ユイにちょっかいを出さないでくれるんですか？」

タカシはソファアの背もたれに体を預け、余裕の笑みを浮かべた。

「簡単な話だよ」

彼は少し間を置いて、じっと俺の顔を見つめながら続けた。

「ユイの代わりに、君がなればいい」

「……は？」

俺は何を言っているのか分からず、目を丸くした。

「ユイの代わり？　男の俺がどうやって……？」

タカシは低く笑いながら、俺を値踏みするような目で見た。

「どうだ？　それでユイちゃんから手を引いてやるよ。約束する」

あくまで強気な口調だった。俺は混乱しながらも、ユイの代わりという言葉の意味がまだよく掴めなかった。でも、ユイを守るなら——その一心で、俺は小さく頷いた。

「……分かりました。ユイをこれ以上構わないって約束してくれるなら」

タカシの顔に満足そうな笑みが広がった。

「いい子だ。じゃあ、これに着替えてきて」

そう言って、彼は近くに置いてあった大きな紙袋を俺に渡した。中を覗くと、女性の服が入っているのが見えた。

「隣の部屋で着替えて。ゆっくりでいいよ」

タカシは俺の肩を軽く押して、隣の部屋に案内した。俺は紙袋を抱えたまま、足が少し震えるのを感じながら部屋に入った。

（これ……何なんだ？ 本当にユイを守れるのか……？）

紙袋から服を取り出すと、そこには女性物のスカートスーツと、女性物の下着が入っていた。

「は……！？」

思わず声が出てしまった。俺は困惑のあまり、紙袋を床に落としそうになる。

（こんなの……着れるわけがない……）

女性用の白いレースのショーツとブラジャー、そしてタイトなスカートスーツ。ユイが着ていそうな、清楚で少し色っぽいデザインだ。

そんな俺の様子を察したのか、隣の部屋からタカシの声が聞こえてきた。

「無理ならいいよ？　これからユイちゃんに食事の誘いの連絡入れるから。そろそろ押しに負ける頃だと思うけど？」

その言葉に、俺の心臓が激しく鳴った。他にユイを守る方法を思いつかない。タカシの言う「ユイの代わり」が何を意味するのか、まだよく分からなかったが……。

「……分かったよ」

俺は震える手で自分の服を全て脱いだ。素肌に白のレースのショーツを履く。布の感触が股間にぴったりと張りつき、変な感じがした。続いて同じデザインのブラジャーを、なんとか分からないながらも背中留める。カップが俺の胸を包む感触が気恥ずかしくてたまらない。

その上にスカートスーツを着る。ストッキングはなかったが、スカートが太ももにまわりつく感覚が新鮮で、鏡を見るのも怖かった。

（ユイの代わり……どうということなんだ……？）

まだ俺にはよく分からなかったが、ユイを守るならと自分に言い聞かせ、恥ずかしい気持ちを押し殺して部屋を出た。

リビングに戻ると、タカシがソファに座ったまま俺を待っていた。彼は俺の全身をくまなく眺め回し、満足そうに頷いた。

「やっぱり良く似合うと思ったよ。シュウジ……いや、今日からはユイちゃんの代わりとして、かわいく見えるな」

俺は両手でスカートの裾を握りしめ、顔を赤らめながら聞いた。

「……ユイの代わりって、何をすればいいんですか？」

タカシは低く笑いながら立ち上がり、俺の近くまで寄ってきた。

「わからずに受け入れるなんて、よっぽどユイちゃんのが好きなんだね」

彼は俺の顎を軽く指で持ち上げ、目を覗き込んでくる。

「簡単だよ。俺がユイちゃんにしたいと思ってることを、全部受け入れてくれればいいんだ。」

タカシの視線が俺の女装した姿を熱っぽく這う。俺の胸の奥で、羞恥と恐怖と、そして奇妙なざわめきが混じり合った。

（これが……ユイを守る方法……？）

タカシはニヤニヤと女性物の服を着た俺をじっくりと見つめていた。

その時だった。

ドクン、と大きく心臓が動いた。急に身体全体が熱くなってくる。燃えるように熱い。頭がぼんやりして、視界が少し揺れる。

タカシは変わらずニヤニヤした笑みを浮かべ、ソファーに座ったまま俺を観

察している。

下半身にあった違和感が、ふっと消えた。そしてブラジャーがきつくなるような、張ってくる感覚が胸に広がる。

「なに……これ……？」

何が起きているのか分からなかった。息が荒くなり、膝が小さく震える。

しばらくして、身体の熱がゆっくりと引いていく。

タカシが低く笑いながら言った。

「薬がよく効いているようだな」

「……薬？」

俺はまだ状況が飲み込めず、困惑したままタカシを見つめた。

タカシは立ち上がって俺の手を引くと、リビングの隅にある大きな姿鏡の前に立たせた。

「ほら、自分の姿を見てごらん」

鏡に映った姿を見て、俺は息を飲んだ。

「え……うそ……」

信じられない光景だった。俺の身体は丸みを帯び、腰がくびれ、太ももが柔らかく女性らしくなっている。まるで本物の女の子のようだ。

驚いて声を上げたが、その声も明らかに高くなっていた。

「声が……高い……？」

胸元を見下ろすと、ブラジャーのカップが明らかに膨らんでいる。さっきまで平らだった胸が、柔らかく盛り上がっていた。

「どうして……こんな……」

俺は鏡に映る自分を呆然と見つめながら、震える手で胸に触れた。柔らかな感触が指に伝わってくる。本物のような、女性の胸だった。

タカシは後ろから俺の肩に手を置き、耳元で囁いた。

「かわいいよ、シュウちゃん。これでユイちゃんの代わり、もっと上手くできるだろ？」

俺は鏡の中の自分――女の子の姿になった自分――を、ただ茫然と見つめることしかできなかった。

タカシがゆっくりと俺に近づいてくる。

その視線は熱く、ねっとり俺の新しい体を這い回っていた。エロい視線というのは、こういうことを言うのか……と思った。背筋がぞわぞわする。

「なかなかいい体じゃないか、シュウちゃん」

タカシは満足げに笑いながら、俺の全身を上から下まで舐めるように見つめてくる。

「ユイちゃんよりは胸は小さいか？」

そう言いながら、彼は後ろから俺の胸に両手を伸ばしてきた。ブラジャーの上から、膨らんだ胸を優しく包み込むように揉み始める。

「キャッ……！」

思わず可愛い声が出た。自分の口から出た高くて甘い声に、俺自身が驚く。

タカシは俺の顔をマジマジと見つめると、ゆっくりと顔を近づけてきた。甘い息が頬にかかる。

「や……っ」

俺は慌てて顔を背けようとしたが、男の力には到底敵わなかった。タカシの大きな手が俺の顎を固定し、逃げられない。

唇が触れた。

ビリッと電流が流れるような感覚が全身を駆け巡る。ドクン、と胸が大きく跳ねた。

「ん……っ！」

タカシの熱い唇が俺の唇を優しく吸い、すぐに舌が口の中に侵入してきた。ぬるりと絡みつき、俺の舌を強引に巻き取るような深いキス。

「んん……はあ……っ」

喘ぎ声と共に、体の力が抜けていく。頭の中では「抵抗しないと……」と必死に思っているのに、身体は勝手に快楽を覚え始めていた。膝ががくがくと震え、タカシの胸に寄りかかるように体が傾く。

タカシはキスを続けながら、胸を揉む手をさらに大胆に動かした。舌を激しく絡め、時折優しく吸う。そのたびに甘い声が漏れてしまう。

下半身が熱くなっていくのを感じた。新しくできた女の子の体が、はっきりと反応している。太ももが内側に擦れ合い、秘部がじんわりと湿り気を帯びていくような感覚。

「んふ……あつ……タカシさん……」

キスが離れた瞬間、俺は荒い息を吐きながらタカシのシャツを掴んでいた。頭はまだ混乱しているのに、体はもう彼の熱を求め始めていた。

タカシは俺の唇を親指で拭いながら、満足そうに微笑んだ。

「かわいい反応だね、シュウちゃん。」

タカシのキスと体をまさぐる行為は、そこで止まらなかった。

熱い唇が離れた後も、彼の大きな手は俺の新しい体を貪るように動き続ける。

胸を優しく揉んでいた手が、次に太ももへと滑り落ちた。

「シュウちゃんの脚、すべすべで細くてかわいい……ユイちゃんみたいだ」

タカシは嬉しそうに言いながら、ストッキングを履いていない素足をゆっくりと撫で上げる。指先が膝の裏をくすぐるように動き、俺はビクツと体を震わせた。

そのまま彼の手は大胆にスカートの中へ入ってきた。レースのショーツの上から、柔らかくなったおしりをまさぐられる。

「あ……っ、んん……！」

「ほら、いい子だ。もっと力を抜いて。シュウちゃん、すごく敏感になるね。薬の効果、最高だよ」

タカシは低く笑いながら、俺のおしりを両手で包み込むように揉みしだく。親指が谷間のほうへゆっくりと沈み込むたび、甘い痺れが背中を駆け上がる。

（気持ち悪いのに……身体が、勝手に……）

頭では嫌だと思っているのに、女の子の体になった下半身は熱く疼き、ショーツがじんわりと湿っていくのを感じてしまう。

タカシは俺の耳元に唇を寄せ、ユイのことをわざとらしく話題にしながら触れ続けた。

「会社でユイちゃんを見てる時、いつも想像してたんだよね。休憩室で二人きりになったら、こうやって後ろから抱きついて……スカートの中に手を入れて、おしりをこんな風に揉みながら『ユイちゃん、俺のことどう思ってる？』って囁いてやりたいって」

「や……そんな話、しないで……あんっ！」

俺が小さく喘ぐと、タカシはさらに嬉しそうに声を弾ませた。

「ふふ、かわいい声。ユイちゃんもこんな声出すのかな？ デスクの下でこっそり触って、会議中に我慢してる顔が見てみたいよ。シュウちゃんはどう思

う？ 俺がユイちゃんをこうして抱いてる姿、想像できる？」

タカシの指がショーツの布越しに敏感な部分を軽く押すように動きながら、俺の意識をユイへと向けさせる。頭の中に、ユイがタカシに同じように触られている姿が浮かんでしまい、胸が締めつけられるような興奮と罪悪感が混じり合う。

「タカシさん……もう……」

「まだまだだよ、シュウちゃん。ユイちゃんを守りたいんだろ？ もっと俺に感じて、かわいく鳴いてごらん」

タカシは俺の腰を引き寄せながら、熱い息と共に耳たぶを甘噛みした。俺の体はますます熱くなり、抵抗する意志が溶けていくのを感じていた。

タカシの指が、ショーツの上から俺の股間に触れた。

「ひゃあんっ……!!」

一際大きな喘ぎ声が、自分の口から飛び出してしまった。甘くて女の子らしい声に、自分でも驚く。

「ふふ、シユウちゃん……もうこんなに濡れてるよ？」

タカシに濡れていることを指摘され、俺は慌てて否定しようとした。

「ち、違う……そんな……」

しかし言葉が終わる前に、タカシの手がショーツの中に滑り込んできた。直接、熱く濡れた股間を指でなぞられる。

「あっ……あんっ！　や……っ」

べちゃべちゃになった指が、俺の敏感な部分を優しく擦り、入り口を軽く押す。信じられないほどの愛液が溢れているのが、自分でもはっきりと分かった。

タカシは指を引き抜くと、俺の目の前にべっとりと濡れた指を掲げて見せつ

けた。

「ほら、見てごらん。こんなに糸を引いてる。シュウちゃんの本当は感じて
るんだね」

どうしてこんなことになっているのか分からなかった。葉のせいか、女の子
の体になったせいかな……頭がぼんやりして、ただ息が荒くなる。

「かわいいよ、シュウちゃん」

タカシは優しく褒めながら、再び下半身をいじり始めた。指がクリトリスを
優しく摘まみ、円を描くように刺激する。続いて、濡れた膣の中に一本の指
がゆっくりと沈み込んできた。

「あぁっ……！　だめ……そこ……」

弄られるたびに、快感が波のように襲ってくる。簡単に絶頂が近づき、俺は
耐えきれずにその場にへたりこんだ。

「いっ……いくっ……!」

体がびくびくと痙攣し、強い快楽に飲み込まれる。視界が白く染まり、甘い声が止まらなかった。

タカシは俺の髪を優しく撫でながら、満足そうに言った。

「かなり感度も上がってるようだね。さすがに今日はこれ以上は無理かな」

（よかった……これで終わり……）

ほっとした気持ちで顔を上げた瞬間、目の前にタカシのちんこがいきり立った状態で迫っていた。

「……………!」

信じられないくらい太く、大きく、血管が浮き出たそれは、俺のものとは比べ物にならないほど遅しかった。先端からは透明な液が滴り、熱い存在感を放っている。

俺は呆然とそれを見つめ、言葉を失った。

タカシは俺の頬を軽く撫でながら、低い声で笑った。

「どうしたの、シュウちゃん？ ユイちゃんの代わりなら、ここからが本番だよ？」

タカシは俺の目の前でいきり立った自分のものを軽く揺らしながら、低い声で言ってきた。

「どうしたらいいか、男の君ならわかるよね？ シュウちゃん」

俺は女の子の姿になった体を震わせながら、さすがに言葉を詰まらせた。視線を逸らして、なかなか手が出せない。

「……」

「してくれないならいいよ。このちんこでユイちゃんを犯すだけだから」

タカシはニヤニヤと笑いながら、わざとらしく腰を前に突き出してきた。その太く大きなものが、俺の顔のすぐ近くで脈打っている。

「それだけは……ダメです……」

俺は震える声でそう言い、タカシのちんこに恐る恐る手を伸ばした。小さくなった俺の手では、握るのも精一杯だった。熱くて、硬くて、血管が浮き出た感触が掌に伝わってくる。

「ん……熱い……」

俺は小さく手を上下に動かし始めた。タカシはそれだけでは満足せず、俺の頭に手を置いた。

「もっとだよ。舐めるように言ってるだろ？」

「……ユイを守るため……」

俺は自分に言い聞かせ、タカシのちんこに舌を這わせた。まずは先端を恐る。恐る。ペロペロと舐め、続いて竿の側面を丁寧な舌でなぞる。

「ん……れる……っ、はむ……」

必死にタカシのものに奉仕する。ペロペロと舐めたり、口に含んで吸ったりするたびに、俺の唾液でタカシのちんこはドロドロに濡れていく。

タカシは気持ちよさそうに息を吐きながら、俺の頭を優しく撫でたり、胸を揉んだりしながら言った。

「いいぞ、シユウちゃん。上手いじゃないか。ユイちゃんよりかわいい口だよ……あっ、もっと奥まで咥えてごらん」

「んぐっ……じゅる……れるれろ……」

俺は涙目になりながらも、太いものを必死に咥え続けた。口いっぱい広がる熱さと味が頭がぼんやりする。

タカシは俺の髪を掴み、軽く腰を動かしながら楽しげに笑った。

「ふふ、ユイちゃんを守るためにこんなに頑張ってるなんて、ほんとに健気だな。もっと舌を絡めて……そうだ、上手いよシュウちゃん」

タカシの褒め言葉と、胸を揉まれる快感に、俺の体はまた熱くなり始めていた。女の子の体になった俺は、タカシの大きなちんこを懸命に奉仕し続けた。

タカシはしばらくすると、息が荒くなり限界が近づいてきたようだった。

突然、俺の頭を両手でがっしりと掴むと、無理やり上下に動かしてきた。

「んぐっ……！ うっ……じゅぼっ……！」

喉の奥まで太いものが突き刺さり、鳴咽を漏らしそうになりながらも俺は必死に我慢した。目から涙が溢れ、息が苦しい。

「出るぞ……シュウちゃん……！」

タカシが低く唸った瞬間、喉の奥深くに熱い精液が勢いよく射精された。

「んんっ……！　うぐっ……」

奥に出されたせいで吐き出すこともできず、俺はぐくんぐくんと音を立てて飲み込んでしまった。苦くて濃厚な味が喉に残る。

タカシは満足そうに息を吐きながら、俺の頭を撫でた。

「イキナリごっくんなんて、才能あるな。シュウちゃん」

嬉しそうな声に、俺は涙目でタカシを睨みつけた。

「そんな可愛い顔で睨まれても、興奮するだけだよ」

タカシは笑いながら俺の頭を優しく撫で、額に軽くキスをしてきた。

「今日はよく頑張ったね。女体化の薬は、数時間後には効果が切れて男の体

に戻るよ。安心しろ」

俺はぐったりとした体で立ち上がり、隣の部屋で元の自分の服に着替えた。鏡に映る自分の姿はまだ少し女性らしい丸みを残していたが、徐々に元に戻りつつあった。

タカシの部屋を出ようと玄関に向かうと、後ろから声かけられた。

「また来週、同じ時間にここに来るように。分かったな？」

今度は何をさせられるのか……。俺は返事をせずにドアを開け、タカシのマンションを後にした。

家に帰り、ベッドに倒れ込むと、タカシの言った通り、数時間後には薬の効果が完全に切れていた。胸の膨らみはなくなり、声も体も元の男の姿に戻っていた。

でも、喉に残る感触と、今日の出来事は鮮明に脳裏に焼きついていた。

(来週……また、あの男のところへ……)

ユイの笑顔を思い浮かべながら、俺は複雑な気持ちで天井を見つめていた。

次の日、ユイと会った。

「シユウジ、お待たせ！ 今日も可愛いね」

ユイはいつもの明るい笑顔で俺の腕に絡みついていた。俺たちは街でデートを楽しんだあと、ユイのマンションに戻った。自然な流れでベッドに入り、キスを重ねる。

でも、俺はタカシとあんなことをしたなんて、ユイを守るためとはいえ絶対に言えるわけがなかった。

「ん……シユウジ、今日はどうしたの？　なんか緊張してる……？」

ユイが優しく俺の頬を撫でながら尋ねてくる。俺は無理に笑顔を作って、彼女の柔らかい体を抱きしめた。

「大丈夫だよ。ただ、ユイが可愛すぎて……」

服を脱がせ合い、俺は自分のものをユイの前に出した。タカシのあの太くて大きなものに比べて、自分のちんこが小さすぎて、急に惨めな気持ちになった。恥ずかしさが込み上げて、顔が熱くなる。

ユイはそんな俺のものを優しく手で包み、顔を近づけてきた。

「ふふ、シユウジのここ、かわいい……」

温かい口の中に含まれる。ユイの舌が丁寧に舐め、優しく吸い上げてくれる。でも俺の頭の中には、昨日の記憶がフラッシュバックしていた。

（昨日……俺はこの倍くらいあるタカシさんのちんこを、必死に啜えて……喉の奥まで……）

その想像が頭から離れず、俺の動きがぎこちなくなってしまう。

「んっ……シュウジ？　どうしたの？　気持ちよくない……？」

ユイが少し心配そうに顔を上げて俺を見る。俺は慌てて彼女の頭を優しく撫でた。

「いや……すごく気持ちいいよ、ユイ。好きだ……」

そのままユイを抱き、繋がった。彼女の甘い声と、柔らかい体が俺を受け入れてくれる。でもタカシの影が頭から離れず、集中できなかった。

「あんっ……シュウジ……もっと……」

ユイは俺の様子に違和感を感じているようだったが、最後まで優しく抱きしめてくれた。クライマックスを迎えたあと、ユイは俺の胸に体を預けてきた。

「今日はなんか……シュウジ、変だったね。でも、好きだよ」

「……俺も、ユイのこと好きだ」

俺はユイの髪を撫でながら、心の中で強く誓った。

（ユイのことは、絶対に守らなければならない……。どんなことがあっても）

タカシとの約束が、重く胸にのしかかっていた。来週、またあのマンションに行かなければならない。俺はユイの寝顔を見つめながら、複雑な思いを抱えていた。